

商標登録で
“企業防衛”

2025年は、国際協同組合年

第27回日本水大賞・2025日本ストックホルム青少年水大賞表彰！

去る7月8日(火)、日本科学未来館(東京・江東区青海)において、日本水大賞委員会及び国土交通省主催による表彰式典並びに受賞活動発表会が開催されました。同委員会は、平成10年6月、安全な水、きれいな水、おいしい水にあふれる21世紀の日本と地球を目指し、水環境の健全化に寄与することを目的として設立された旧日本水大賞懸賞制度委員会が第7回から現名称に変更されたものです。

当日は、同委員会名誉総裁の秋篠宮皇嗣殿下ご臨席の下、まず主催者で同委員会委員長の毛利衛氏が「日本水大賞委員会名誉総裁・秋篠宮皇嗣殿下をお招きして今日ここに第27回日本水大賞・2025日本ストックホルム青少年水大賞表彰式を行えますことをとても光榮に存じます」と述べた後、「現在2025年大阪・関西万博が開かれています。55年ぶりになるわけですが、前回の万博では、アメリカ館の月の石が話題を呼びました。今回は日本館で展示されています非常に大きな火星からの隕石です。これは火星から飛来した隕石ですが、極地研究所の観測隊が南極で採集しました。地球上の大陸の中では、南極だけが季節に拘わらずいつも厚さ4000メートルの水に覆われているわけです。その為に周りには地球の石は一切ありません。石が見つかればそれは宇宙から飛来した隕石というふうに分かります。隕石は氷河に乗って移動しますから、特定の低い場所に集まるわけです。極地研の研究者はそれを発見して沢山の隕石を南極で集める方法を開発しました。南極では水は個体として存在しますから、氷河になって移動するわけです。水の物理的特徴が今回の素晴らしい日本館での火星の大きな隕石の展示になりましたので、是非皆さん興味をもってご覧いただきたいと思います。

■治水事業は、地域社会の安全・安心の要

日本では、自然の水が季節ごとに多様で豊富なわけですが、一方で制御しがたい力を持つために、沢山の被害を受けています。治水事業は、地域社会の安全・安心の要であり、それを達成する過程で更に新しい文化を生み出します。また地球規模での気候変動や環境変化の水の関わり、更に詳細に研究するためには、ビッグデータや人工知能を使って上手く処理しなければならないわけですが、絶えず絶えず新しい先端科学技術を取り入れる努力が必要です。

ところで、日本水大賞委員会は水にまつわる多様な活動をしている多くの方々を表彰する機関なんですが、日本の地域から世界へ更に未来へ、人類の持続的な社会へ貢献することを目的としています。今回応募されました個人と団体、選考の為に労を取られました審査部会の先生方及び協賛団体をはじめ、関係する全ての皆様のご協力に、日本水大賞の代表として感謝し御礼申し上げます」と挨拶。

次いで同じく主催者の国土交通大臣の中野洋昌氏は同様に名誉総裁のご臨席に感謝の辞を述べ、続けて「水というのは生命や社



日本水大賞委員会を代表して挨拶する毛利衛委員長

同じく主催者として国土交通省より挨拶する中野洋昌同大臣

同名誉総裁の秋篠宮皇嗣殿下のお言葉

皇嗣殿下より日本水大賞表彰状授与(左は吾妻中央高等学校)

各賞受賞者へお言葉を掛けられる皇嗣殿下(右は宮古総合実業高校)

会に恵みをもたらす資源である一方で、洪水や渇水など人の生命や豊かな生活を脅かす存在にもなります。日本のみならず世界中で気候変動をはじめとする様々な社会課題とも結びついています。国際社会におきましても水にまつわる課題について非常に高い関心が多く、多くの国から寄せられています。昨年5月には第10回世界水フォーラムがインドネシアで開催されました。世界各国から首脳級をはじめ多くの関係者が集まり、世界の水問題について繁栄を分かち合う為の水をテーマに様々な観点から議論されました。また我が国におきましても令和6年能登半島地震発生などを踏まえ、昨年8月に水循環基本計画の変更を行い、流域総合水管理を位置付けるなど、健全な水循環の維持・回復に向けて取り組みを進めているところであります。こうした国内外の水に関する課題を解決するためには、各国や関係省庁の行政における取り組みと市民、NPO、大学、企業等の多様な主体による地域に根差した取り組みとが車の両輪となり一緒に進んでいくことが必要であります。今回受賞される皆様には今後も各地域におきまして水循環に関する活動にご尽力されることを期待申し上げます」と挨拶。

主催者の最後に同委員会名誉総裁の秋篠宮皇嗣殿下から、右記のお言葉を頂きました。

■関連各省から副大臣等が参列し祝辞と賞状授与

水に関する事業は社会の多方面にわたり、今回は国交省をはじめとする5つの省の大臣賞が設けられました。祝辞順に紹介すると大森恵子(環境省 水・大気環境局長)、庄子賢一(農林水産大臣政務官)、金城泰邦(文部科学大臣政務官)、大串正樹(経済産業副大臣)の各氏が参列し祝辞と各賞のプレゼンターを務めました。

また表彰後には第27回日本水大賞の群馬

「第27回日本水大賞 2025日本ストックホルム青少年水大賞」表彰式

名誉総裁お言葉

2025年(令和7年)7月8日(火)

本日、「第27回日本水大賞 2025日本ストックホルム青少年水大賞」の表彰式が開催され、皆様にお目にかかれたことを大変嬉しく思います。そして、本年各賞を受賞される皆様に心よりお喜びを申し上げます。

さて「水」は、私たちの暮らしを取り巻く自然の中でも最も身近な存在のひとつです。そして、人類のみならず地球上の生命にとって必要不可欠であるとともに、かけがえのない恵みを与えてくれるものでもあります。そのいっぽうで、近年頻発する大雨をはじめ、水は自然界の中で循環する過程で深刻な自然災害をもたらすものであることも忘れてはなりません。そして国連の2030年までの「持続可能な開発目標」では、「すべての人々の水と衛生の利用可能性と持続可能な管理を確保する」との目標が掲げられ、水に関する事柄が地球規模の課題になったことは皆さまご存じのとおりです。

そのような中、日本水大賞は、安全な水、きれいな水、おいしい水にあふれる日本を目指して、水循環系の健全化に向けた諸活動を広く顕彰するものです。本賞の対象となるような活動は必ずしも世の中に知られずに、全国で様々な主体により独自性のある取り組みが行われています。今回の第27回日本水大賞には、そうした取り組みを行っている団体・個人から75件の応募がありました。

第27回日本水大賞には「群馬県立吾妻中央高等学校環境工学研究部」の活動が選ばれました。同校では、地域の土地改良区からの依頼を受け、農業用水路の管理データの作成に取り組みしました。言うまでもなく水は稲作に不可欠なものであり、水田地帯に張り巡らせた農業用水路は稲作を支える最も重要なインフラです。この農業用水路は、整備後の時間経過とともに老朽化が進み、農業従事者の高齢化ともいまって、その管理が大きな負担となっていました。同校の生徒たちが現地に入って測量し、総延長34kmにも及ぶ水路図を完成させ、水路の補修にも取り組まれています。稲作を巡る多くの課題が明らかになっている昨今、このような高校生の取り組みには、明るい未来を見るように思えます。

また、2025日本ストックホルム青少年水大賞には「沖縄県立宮古総合実業高校環境班」の活動が選ばれました。同校は、第6回につづき2回目の受賞となります。宮古島は飲料水を地下水に依存するいっぽうで、サトウキビ栽培をはじめとする農業に用いる土壌浸透性農業が地下水に残留していることが懸念されています。同校では、土壌中のリンの活用を進める研究の過程において、サトウキビの搾りかすから生成される「バガス炭」が土壌浸透性農業を吸着し、分解する機能を有する可能性を見出しました。この研究は、宮古島だけでなく、世界で懸念されている農業による水環境の汚染を抑制する、新たな農業技術の発展につながるものと期待されます。

私たちは、水から受ける恩恵に感謝し、健全な水循環系を礎とした国土と自然を後世に引き継いでいかなければなりません。本賞が、そのひとつの契機となり、多くの人々がそれぞれの地域で水を守り、水について考える活動を実践していかれることを願っております。

おわりに、水に関わる皆様の活動が、日本はもとより世界へと発展していくことを祈念し、表彰式に寄せる言葉といたします。

県立吾妻中央高等学校 環境工学研究部が「地域の農業を守りたい ～老朽化した農業用水路の保全に向けた高校生の取組～」を、2025日本ストックホルム青少年水大賞の沖縄県立宮古総合実業高校 環境班が「宮古島の命の源である地下水を化学農業汚染から守る研究」の活動発表をそれぞれ行いました。そして終了後には場所を移して、秋篠宮皇嗣殿下より同2校の大賞受賞者にお声がけされる機会が得られました。 全撮影:大倉裕一

詳細は右記HPをご覧ください。→ <https://www.japanriver.or.jp/taisyo/jyusyoushiki/no27/index.html>